

# 人口減少対策調査特別委員会行政視察報告書

人口減少対策調査特別委員長 飯塚 孝子

【視察日程】平成29年1月16日（月）～17日（火）

【視察委員】飯塚孝子委員長，山際務副委員長，渡辺仁委員，内山則男委員，伊藤健太郎委員，吉田孝志委員，内山航委員，平あや子委員，小柳聡委員，串田修平委員，石附幸子委員，松下和子委員，中山均委員

【視察地】浜松市，流山市

【調査事項】浜松市：浜松市“やらまいか”人口ビジョンについて

流山市：流山市まち・ひと・しごと創生総合戦略について

## ○浜松市“やらまいか”人口ビジョンについて【浜松市】

### 1 ビジョン策定時における、人口動態の要因分析について

#### \*時系列による人口動向

浜松市の人口動態は、住民基本台帳人口及び外国人登録者人口ベースで見ると、2008年をピークに減少傾向に転じ、社会動態は2009年に社会減（外国人を含む）に、自然動態は2011年に自然減に転じている。社会動態の動きを見ると、2009年から2011年までは、転入数、転出数ともに減少傾向であったが、2012年から再び転出数が増加しており、社会減が拡大している。自然動態の動きを見ると、2011年に死亡数が出生数を上回った後も死亡数の増加、出生数の減少傾向が続き自然減が拡大している。

#### \*人口移動

15歳から19歳までは転出超過傾向が続いており、20歳代は転入超過の傾向にある。特に2014年では、30歳代から40歳代までの男性の転出、20歳代女性の東京圏への転出が目立っている。

#### \*将来推計人口

現在の出生率や移動率が続くと仮定すると、2060年の人口は50万人台まで減少する。人口構成を最適化するためには、出生率の上昇が不可欠となる。

## 2 要因分析に基づく施策の展開について

国の地方創生の取り組みに基づき、今後目指すべき方向と人口の将来展望を描く「浜松市“やらまいか”人口ビジョン」を策定。また、人口の将来展望の実現を目指すための基本目標及び達成するための政策・施策を定めた「浜松市“やらまいか”総合戦略」を策定し、人口減少克服に向けスタートした。(計画期間 2015年度から2019年度までの5年間)



### \*基本目標Ⅰ 若者がチャレンジできるまち

「仕事のない場所に人は集まらない！」

#### ○若者、子育て世代の生活基盤の安定

##### ① 地元産業力の強化

- ・イノベーションの連鎖を生み出す新産業の創出と既存産業の高度化
- ・海外展開支援と集積による地域企業活性化
- ・新規創業・就農のチャレンジサポート
- ・担い手第一主義の農林水産業振興
- ・浜松版スマートシティの推進

##### ② 労働供給力の開拓

- ・チャレンジ・再チャレンジを後押しする就労支援
- ・だれもが働きやすい労働・雇用環境の整備

### \*基本目標Ⅱ 子育て世代を全力で応援するまち

「理想とする家族像が実現できないなんて夢がない！」

#### ○希望出生数をかなえる環境整備

##### ① 結婚・妊娠・出産・子育ての切れ目のない支援

- ・結婚・妊娠の希望を全力で支援
- ・安心して出産できる環境づくり
- ・待機児童の解消と子育て支援の充実

- ② 「創造都市・浜松」を担う次代の育成
  - ・第2、第3のノーベル賞受賞者の育成
  - ・地域の力を活かした市民総がかりのひとづくり

\*基本目標Ⅲ 持続可能で創造性あふれるまち

「浜松に住み続けたい!」「浜松で暮らしたい!」

○だれもが引き寄せられる都市の魅力を創出

- ① 安全・安心なまちづくり
  - ・災害に強いまちづくりの推進
- ② にぎわいの創出
  - ・創造都市の推進
  - ・浜松・浜名湖ブランドの確立による交流人口の拡大
  - ・地域の特性を活かした魅力づくり
- ③ 支えあいによる地域社会の形成
  - ・次世代を見据えた地域コミュニティの形成
  - ・人と人とのつながりをつくる社会の実現
  - ・政令指定都市トップの健康寿命の延伸
- ④ コンパクトでメリハリの効いたまちづくり
  - ・拠点ネットワーク型都市構造の形成
  - ・効果的・効率的な市民サービスの提供

3 その他、人口減少対策として特に重視する施策について

若者がチャレンジできるまちとして

- 「ものづくりのまち」の次代を担う成長産業へのチャレンジ支援
- “やрмаいか精神”が根付く地場産業の支援
- 天竜材のブランド力強化及び流通拡大
- 日照時間日本一を活かしたエネルギー自給率の向上
- ハピキャリ（無理しない）もバリキャリ（キャリアを上げていく）も活躍できる環境づくり

子育て世代を全力で応援するまちとして

- 子どもの才能を伸ばす特別課外講座の充実  
（全国レベルのコンテスト入賞目標の設定、天野浩さんのようなノーベル賞受賞者の誕生）
- 子どもの興味を引き出す機会の充実
- 地域愛をはぐくむ教育の実践（動画の作成）

持続可能で創造性あふれるまちとして

- 防潮堤の早期実現 17.5 キロメートル  
(企業から 300 億円の寄付, 平均 13 メートルの防潮堤)
- 多文化共生による市民主体の地域社会の形成 (日系ブラジル人が多い)

#### 4 所見

本市と同規模の政令都市である浜松市。人口減少対策においては、子ども・若者・子育て世代への支援が手厚くなっているように思う。それは出生率からもわかる。浜松市の出生率は 1.57 で全国平均を上回っている。

しかし、女性が戻ってこないという問題もある。ヤマハやスズキなど自動車やバイクのメーカーなどがあり製造業が発達している。男性にとっては、仕事を探すのは大変なことではないが、女性にとってはキャリアを作れる仕事あまりなく一度出ていくと戻らない。それが人口移動でも表れていて、20 歳代の男性は転入超過、女性は転出超過となっている。このことが総合戦略の中で「若者がチャレンジできるまち」として最初に示されている。本市においても参考になるのではないだろうか。



44 の施策とそれに対する 199 の個別事業 (1,000 事業の中の 199) が展開されているが、まちの資源を活かしたものが多いうように思った。本市においても、特色ある施策の展開と子育て世代への支援が重要なのではと考える。

## ○流山市まち・ひと・しごと創生総合戦略について【流山市】

### 1 流山市の概要

昭和 42 年に人口 42,000 人で合併を行った。2017 年 1 月に 50 周年を迎え現在の人口は 18 万 248 人を突破。

近藤勇が土方歳三と別れた場所であり歴史のある町だったが、つくばエクスプレスが開業し若者が多く流入する都心のベッドタウンとなった。

### 2 人口の推移

・人口の推移については人口ビジョンを上回っており、18 万人をピークに減少するという人口ビジョンを立てていたが、人口の増加は 20 万人を上回る勢いである。

・デュークス世代に絞って政策を打ってきたことが現在の人口増加につながっているものと考えている。

・市の知名度を上げたのがキャッチフレーズであり、「母になるなら、流山市。父になるなら、流山市。」というキャッチフレーズは有名。

・これによって流山市のブランド化が図られ、30 歳代、40 歳代の流入が増加したと考えられる。

・デュークス世代が増加したことによって、保育所の整備が一番の課題になっている。

・待機児童は最重要課題として取り組んで 800 人の定員増を図っているが、まだ解決には至らず平成 27 年現在で 146 人。

・人口増加のもう一つの原因は、つくばエクスプレスが開業したことによる都心へのアクセス強化が考えられる。つくばエクスプレスは秋葉原駅から最短 20 分で南流山駅に到着する。

・人口は毎年 3,000 人から 4,000 人ふえている。

### 3 流山市が考える 2 つの危機

・急激な少子高齢化。生産年齢人口の減少。

・宅鉄法（つくばエクスプレスを通すための法律）による区画整理事業がもたらす市の負担増。また、つくばエクスプレス沿線の区域の中で競争が激化することが予想された。

#### 4 流山市の戦略

- ・いかにして流山市が抜け出たのか。

その一つがマーケティング戦略を立ち上げたことにある。市を売り込む戦略として平成 15 年にマーケティング部を新設した。外部から登用し、5 名中 3 名外部の方を採用した。

#### 5 3つの戦略

○都心から一番近い森のまち。

- ・都心から近い森のまちをアピールし、ブランド化を促す。
- ・流山市は以前から森のまちだったが、宅地化していくにしたがって森が減っていき、森を減らさないでほしいという市民の声が上がり、森の公園を残し、それがブランド化につながった。

・緑を増やす開発。緑被を回復させる戦略に取り組み始めた。流山市が独自に始めた戦略であり、基準が 1 から 3 まであり、それに認定された場合は銀行の融資が有利になるなど様々な効果をつけた。資産価値が上がるという報告もある。

○共働き子育て世代をターゲットとした戦略

「母になるなら、流山市」

- ・交流人口の拡大を目指している。
- ・子育て施策。共働き世帯をターゲットとした施策。
- ・保育所を整備。駅から各保育所にバスで送迎するシステムを確立し、駅前保育ステーションを整備。そこから親は仕事へ行くことができるため行政としても遠方の保育所を紹介しやすくなった。
- ・しかしながら現在 146 人の待機児童がまだおり、市の最重要課題となっている。

○質が高く地域資源を取り入れたツーリズム。

・森の公園には大きな広場があり、様々なイベントを行っている。スケート場を即席で作ることもあり、多くの方でにぎわっている。イベント時には 45%が市外の方になっている。

- ・15 年前は市民の為の市民のイベントしかなかった。
- ・最近では市内の全域で交流人口の拡大を目指したイベントが多くなってきた。
- ・市が力を入れている事業。

流山街道に古い街道や建物がある場所があり、そこへ人を呼び込む戦略。

古民家を活用したカフェなどに補助金を出したりしている。

例：万華鏡ギャラリー

- ・流山市の交流人口は 6 年前の 2 倍になっている。

## 6 これまでの成果

- ・10年前の合計特殊出生率は、1.2だったが、今は1.53になっている。
- ・人口の社会増減は、平成27年で社会増3,500人の転入超過。
- ・転入超過数は全国で10番目。
- ・人口推計と実績を比べると、平成27年では推計を1万7,000人上回っている。高齢人口は推計を下回り、年少人口はふえている。
- ・つくばエクスプレス開業後、人口は2万7,000人ふえている。
- ・10年たてば人口構成がスライドしていくが、子育て世代が入ってきているため、年少人口構成がふえている。実際年少人口が2,000人増加している。

## 7 所見

子育て世代に焦点を当てた戦略は、他のつくばエクスプレス沿線との比較を見ても成功しているようである。事実として人口がふえ、人口構成も年少人口がふえている。今後は学校建設や保育所整備が喫緊の課題となっているようで、本市でいうと昭和の終わりのころの人口増加にいかに対応するのか、という状態と酷似しているように感じた。今後日本全体の人口が減少していく中で、学校関係のインフラをどのようにマネジメントするのかというビジョンをともに示していくことによって、人口増加に対応しながら来たる人口減少へ無駄な建造物を作りすぎることなく、または残すことなくスムーズに移行していく戦略を描くべきと感じた。本市は人口減少時代に完全に入り、学校や公共施設などの統廃合はこれからますますふえていくと考えられる。現在様々な状況で人口が増加している他都市の手本になるようなインフラ整備、統廃合の未来像を示すことが政令市新潟に求められていると感じた。

